

# 重ね寫眞に就いて

理學博士 坪井正五郎

只今まで大學に用事がございましたのと、それから今又急に用事が出来まして緩つくり御話する違がありませぬから大部分省きまして少しく申上げます、題を掲げますれば「重ね寫眞」といふことであります、何せそんな御話をするかと申しますと、此頃三越呉服店で兒童博覽會がありますに就て何か參考品を出して貰ひたいといふ相談を受け、私が不良少年の「重ね寫眞」と云ふものを出したのであります、然るに偶然なことでもあります、が三越で様々お催しのあることで私の出した「重ね寫眞」と同じ形式の七美人の重寫眞と云ふものが出来た、それは美人の顔を七つ集めたのである一方は男、一方は而も麗しい美人、一方はねぢけた心、剛情な心といふ總て此點に於て反對の事柄を同じ形式を以て妙な結果を生じたのであります、それで殊更に斯ういふ重ね寫眞の御話をして

不良少年の顔といふものはどんなものであるか、それらの事を申上げて何かの參考にならうかと思ふのであります。多數の方の中には既に御覽になつた方もありませう、若しまだ御覽になりませぬなれば陳列してあります其處を昇ると食堂がある、汽車がある其側に參考品の入れる所がある、それであるから熱心の人が通り掛りに見る、所が食堂の混雑、汽車に乘切れないから澤山に廊下で待つて居ると云ふやうな有様、さういふ譯で見る人があるが、どうかと思つて時々様子を見に行きます、此寫眞の前に立つて居る人が割合に多いやうであります、中には中々趣味を持つて居る人もあると云ふことを知つたのであります、一體この「重ね寫眞」と云ふものは歐羅巴でして居つたのであります、學問上の役に立つことは少なかつた、それで今から十何年前殆ど二十年も前のこととでありますが、私はどうかして學問上の役に立てたいと云ふことを考へて、それには色々の人の性質と云ふものが顔に現はれる、それで心の中では如何なる性質の人はどういふ風の顔付であると

云ふことを知つて居るが、併しそれを口で言ふことはムツかしい、例を擧げると意け者と云ふ者は誰のやうな顔であるといふことを人を指して言ふのは甚だまづい。

抽象的のことを言へば斯う云ふことを思つて居つたのであります、一つ此重ね取寫眞と云ふものを

學問上に應用して見やうと考へたのであります。

元來「重ね取り」と云ふものはどうして初つたのであるかといふと大勢の畫家が肖像などの書いた時分にそれが正しく現はれて居るか居らないかといふことに付て哲學者のスペンサーが薄い紙に肖像を書かして、其幾枚もの肖像を再び透して書かせる癖といふものが消えて正しいものが出來るだらうと云つた、それが本になつてガルトンと云ふ人は之を紙を重ねて透すよりも寫眞の技術を應用して更に焼付けたら宜からうと云ふので、後に實際やつて見た。所が好い結果を得ましたので之を世間に發表したことがある、面白い技術と世人が思つた。それでも初めの中は慰みにやつたのである、何處の奥様の顔と何處の貴婦人の顔を集

めて見るとどんなものになるかと云やうなことで少しも意味のないものであつた。それではイカぬ何か役に立てやう、或は人の性質が顔に現れて居るかどうかといふので専門に顔を並てやらうと企つた人もありました。或は美術家であるとか數學家だとか、さう云ふやうな者ならばどうか、植物學者の顔はどうかと云ふ様に取つて見様としたのです。併し其探つて役にも立ちさうに思ふのは例へば或は紳士的の顔であるとか、或は人の好む顔であるとか、或は輕蔑される顔であるとか、自分の心には思はないが他の人からは能く見られる顔だとか云ふ様に兎に角、妄りに變化することの出來ぬ顔でなくては困る。意けものは何んな顔付をして居るであらうか、勉強家は何んな顔付をして居るであらうかと云ふ類でなくては折角寫眞を採つてもだめである。夫れでさう云ふ據らない顔に就いて探して見たが、中々思はしい顔がない、それを集めることが中々六ツしかつた。例へば善人

と惡人、此の善人の寫眞を撮つて之は慈善事業に金を出したから紳士だと云つた所で果して其人が

眞實さういふ優しい性質の人であるか、又中には  
無け無しの五十銭か一圓の金を出す本統に慈善の  
考のある人もある、又中には百圓二百圓の金を  
サッサと出す度々来るから五月蠅から出す、  
中には又自分の名が新聞に出るから嬉しいと云ふ  
ので出す、さう云ふものを撮つて金を出した人の  
顔と云つた所で果して其性質が現はれるか何うか  
怪しいものである。それで何處かにさう云ふやう  
な顔を寫す所はあるまいかと思つて段々考へし所  
がそれが二ヶ所ある、一は監獄署、監獄署であれ  
ばアツチへ向けコツチへ向けと云ふこともマナ自  
由に出来る、それからもう一つは感化院、是は不  
良少年が集つて居るのであるからヤサしい、監獄  
に這入つて居る者は社會で認めて之は宜くないこ  
とをしたものと定まつたものである。けれども時  
に依つて違ふ、或る場合には罪人と見做されて居  
る者でも他の方で宜いものと見做されて居ること  
もある、場合に依ると殺すのが宜いと云ふことも  
ある、人殺の顔を寫した所が果して悪人か何うか  
判らぬ。窃盗をすると云つても盗んだと云ふこと

が容貌に現はれるといふことは無さうだ。であ  
るから監獄で調べた所が果して性質が現はれて居  
るかどうかわらぬ、之に反して感化院に這入つて  
居る者は親が世話が出来なくて持て餘して感化院  
に入れたので、始末にをへないといふ點に於ては  
同じ性質を持つて居る、それで牢に這入ると云ふ  
ものならば社會が認めて悪い人間とした者を入れ  
て置いたのであるが、尙ほ精確にいふと悪いこと  
をして捕へられたものだけが居る所である。けれ  
ども本統の大悪人は捕まるやうな下手なことはし  
ない、皮肉に云ふと捕へられる位の奴は中位の悪  
人で極く悪い大悪人は中々容易に捕へられない、  
捕まるのは第二流の悪人である。然るに不良少年  
と云ふのは家に置けないと云ふ人間であるから大  
抵同じ位である、さうして此不良と云ふものが大  
凡三つ位になつて居る、斯う云ふ譯で感化院で寫  
眞を撮ることになつたのである。そこで帳面を見  
たら宜からうと云ふので繰つて見ると本名は知ら  
せない、本氏名は俗名と稱して普通は用ゐないで  
特に別の名が與へられてある、姓も明さない、誰

れは何處の者だと云ふやうなことが知れては氣の毒だから本名は知らせない、さういふ譯になつて居るので、それで閻魔の帳面を繰つて見ると大層立派な名が書いてある、性質が書いてある、それで懶け者、或は手癖が悪いとか、剛情だとか云ふ種類を集めて寫眞を十二三人撮つた、さうして焼付ける時に硝子に寫して鶏卵紙の上に載せる、若し一枚のものを十人焼くならば一人づゝ鶏卵紙へ載せる、さう云ふ風にして重ねると云ふと一つ寫る、丁度鉛筆で書くのと同じやうに重つた所が濃くなる、一二遍やると性來の顔付き性質等が現はれる如く、他から見ても可愛いか憎らしいとか其中から同じ性質のものを集めやうとする、産れ付の特長であるとかいふものが薄く消えて仕舞つて懶け者と云ふ通有性だけがハッキリ出て來ると云ふことも出来る、斯やうにして出來た所の剛情の顔を抽象すると云ふやうなものである、近頃池田と云ふ人が味の素と云ふものを拵へた、ア、云ふ風に甘いとか辛いとか、甘いといふ味が色々の特長のある中に斯んな性質でどう云ふ風の傾

があるかといへば一方は美人、一方は惡人、之を分析して得たものであります、同じ處が重なる、誰れの顔でも無い性質を現はすことが出来る、即ち色に付て申しますと青とか白とか又味にては甘辛いとか、丁度人の顔形に於ても種々の性質のある如く抽象的に此性質は斯んなものであるといふかとか言へる、抽象的に形に現はして出すといふとソンのものであります、抽象的に立派な形に出て來る、斯ういふ面白いことになるのであります、三井に出してあるのは三つあつて一々説明が附してあるから誰が見ても分る、詐欺でもするか悪いことをする奴はマア目を細くして人の顔を忍んで見ると云ふやうなのである、さう云ふやうな者が寫眞に現はれて居りますからアレは手癖が悪るさうだ、何れが油斷がならない顔だと云ふことと別る。

扱て斯やうな寫眞を寫した所で何の役に立つかと云ふに、若しも斯う云ふ顔の者は剛情だ、どうも之に似て居る、どうも困つた者だと云つて心配しても仕方がない、さう云ふ場合には懶け者の顔に

陥らないやうにしなければならぬ、剛情に傾きさうだから眞直の方を持つて行くやうに豫防するところとが出来る、豫防した種々の其顔付はどうなるかと云ふと性質が顔に現はれるものであるから心が直れば顔付も直つて来る、是は平生の喜怒哀樂に鑑みて分る、常に快活にして居ると顔付も快活である。さういふことに付て考へても分る、何か心配事があるといふと人の前では快活の風を装うてもトンチン漢な返事をしたりして心の中が面白くないと云ふことが分る、又嬉しいことがあると大勢の前で時々思出し笑ひなどをする、幾ら隠さうと思つても出て来る、精神状態は顔色に出て来るのであつて悪いことをしやうと思つてもそれがチヨツと出て来る、心が改まるといふと泥棒の顔をする事が出来ない、勉強家が懶け者の顔をしてイケない、又剛情でも手癖の悪い人間でも寫眞に比べて見て落膽するに及ばない、それを直すといふと立派な顔に傾く、重ね寫眞にある性質のものは斯やうな通有な顔を持つて居ることを知るばかりでなく早く其事に氣付いて悪い方に傾かない

様に注意せねばならぬ。教育に従事する人は其事を言つて居る、又悪いことをしない中にそれを止めることが出来る、心の状態に依つて顔形の違ふと云ふことはどんな社會に於てもある、例へば位地が低く思ふ通りの事の出来ない者も位置が上ると云ふと如何にも貫目が付いてズツシリとして何となく其顔付も宜くなる、我が見てる精神の外に現はれて居るといふことか見へる、心の中に愉快なことがある、それが見へて来る、斯ういふ譯で「重ね寫眞」と云ふものは愚みに用ゐるやうで利益のあるものである、是は參考室にある方であるか、前に申した七人の婦人を重ねて美といふ形を出したものがあつて、元來此美であるとか醜であるとか好きであるとか嫌いであるとか云ふことは是其人々の好みであつて歐羅巴人が見て美しいと云ふが日本人が見ては醜いことはいないけれども餘り澄してツンとして居るから好かないと云ふことがある。嫵致は宜いが愛嬌がないと云ふこともある。それから又場合に依ると見惡いけれども好きだと云ふこともある、さういふ風に醜美といふも

のは人に因つて違ふものである。又之は歴史的關係もある。所で多くの人の美人だと云ふものを重ねて取る、其處に美の標準といふやうなものが出て来る、大勢の標準一個人の標準は斯んなものであるといふことを示すことが出来る。三井に出してあるのは即ち此種のものである。一方では心の現はれ方を形の上に現はすといふことも出来るし一方では異なる標準を極めることが出来る次第であります、現今諸所にピラになつて下つて居る寫真に付て申ししたのであります、極く簡略に面白くすることがある、兩方で見ると寫真、景色などが重ねて浮いたやうに見える、普通の寫真では平に見へるが、二つを一時に見ると浮上する、さういふものを立體鏡とも言つて居る。

普通は右左に別々に入れるのでありますが、それに違つた人の寫真を入れて見る、其右と左に違つた人の寫真を入れる、所が幸にして多數の人が寫真を寫すのは手札形である、西洋人はカビネに寫し且つ其向きもきまつて居らぬが日本人は極つて居る正面もなく横向もない、此位の寫真です、

日本人の顔を見るのに寫真屋の誂通りに寫してある、何處で寫した寫真でも極つて居る、型が極つて居る、チヨツと新婚の寫真などを見ますとお嫁さんは斯う向いてお婿さんは斯うやつて居る、寫真屋がやつて来て斯んなことをやるのです、西洋人は色々面白い形をやりますが、日本の寫真屋は御師匠さんに教つた通りにやる、其人の顔を合せて見るとチヨツと似るのであります、元來景色などは浮いて見える、其目的とは違ひますが應用して見ると二人の顔が重つて仕舞ふ、其結果といふものは二人の顔が五分／＼に出る、半々に出るのであるからどういふ性質を現はすといふのではない、二人こね交したと云ふ顔である、それをやつて見るとチヨツと出来る、焼く時に幾つもの別々の顔が集つたのであるが今の立體鏡を用ゐると只二つの寫真が集まればどんなものであるかと云ふことがわかる。是は焼附ける代りを簡單にするものである。

以上御話した趣意といふものは三井の兒童博覽會に私の考へた顔が置いてありますからそれで見て

戴きたい、それに附加へて「重ね寫眞」と云ふものはどんな利益があるかと云ふことを申ししたのであります、實はもう少し御話したいのであります、丁度今行かなければ間に合はぬといふ用事を控へて居りますから甚だ短くて失禮ですが是で御免を蒙ります。(總會演説、文責記者)

## 習慣の話

(心理學通俗講話會)

文學士 上野 陽一

▲習慣の範圍　オルガン、ピアノ三絃などの樂器を新調して、第一に君ケ代の曲を奏しますと、其樂器は、永久君ケ代を奏するに最も適當すると云ふことであります、又初めて弾くときは、音樂の上手な人に彈いて貰つて、樂器に良い癖を附けて置くのが必要であると云ふことは、一般の人の好く知つて居る處であります、日本に來て居る西洋人は、日本人の習慣に就て感心することが澤山ありと云つて居るさうですが、就中高い齒の足駄を

八  
穿いて、石疊の上を轉びもせずカタ／＼と駈けて往くことや、盲人が暗闇に脱ぎ捨てた下駄を、足の先で探し出すなどは實に不思議中の不思議だと思つて居るさうです、成程是等も一つの習慣には相違ないのですが、私共が學問の上で研究する習慣と稱するものは、モット生命のある興味深いものであります。

▲習慣の意味　本能的習慣とは何う云ふ意味であるかと云ふに、これは學問上の熟語としても用ひられて居りますが、又俗語としても多くの場合に用ひられて居る語であります、又本能と習慣との區別を申せば、生れてから後に養はれた作用が習慣で、生れながら有つて居る作用は、之を本能と云ひます、併し本能と習慣とは密接な關係を持つて居りまして例は小供は天性として恐怖の念を起し、同時に子供は好奇の本能を持つて居ります、子供が犬を見ると恐怖の心を起し逃げやうと思ふと共に、その怖いものを何うかして好く見たい、好く知りたいと云ふ、反對の本能を起します、其場合に若し親がその一方のみを抑へて、一方のみ